

おためし

あっけし牡蠣博士認定実行委員会 ワークショップ報告



参加型ワークショップ 「あっけしの食と文化と環境をどう守るか」が 開かれました

去る11月7日(日)、たけだ工務店(厚岸町太田)において、「あっけし牡蠣博士認定実行委員会」(以下、委員会)の委員ほか有志11名による参加型ワークショップ「厚岸の食と文化と環境をどう守るか」が開かれました。プログラムを表1に示します。

このワークショップには、ふたつの目的がありました。ひとつは、「あっけし牡蠣博士認定試験」をおこなう際のスタディ・ツアー(参加者に厚岸の産業や文化を体験的に学習してもらうツアー)を考える手法としての試行、もうひとつは、この機会に「厚岸の食と文化と環境をどう守るか」について意見交換をすることです。

はじめに、竹田敏夫 実行委員長が、「『厚岸の食と文化と環境をどう守るか』というテーマは、『厚岸の牡蠣に付加価値をつけて売っていくことで環境を守ろう』という委員会の本来の趣旨に近いこと、是非、みなさんと協力してやっていきたい」と開会の挨拶をしました。そして、参加型ワークショップのおおまかな構成(1. アイスブレイク、2. 話し合い、3. ふりかえり)と本ワークショップの予定についての簡単な説明の後、「お試しワークショップ」は始まりました。

1. アイスブレイク「冬の厚岸、私の思い出」

「アイスブレイク」とは、ワークショップの冒頭におこなう活動です。これは、文字通り、参加者の間にある「見えない氷」を割って場を温め、参加者がうちとけて話し合えるような雰囲気をつくるためのものです。

今回は、まず、簡単なクイズについて考えた後、「冬の厚岸、私の思い出」というお題で、それぞれが今まで過ごしてこられた厚岸の冬の記憶のなかでも、とくに忘れられない思い出について語っていただきました。

子供の頃の厚岸湖での氷網(こおりあみ)漁、湖面が凍って1か月間、漁業ができなかったこと、冬の海の作業で凍傷にかかったこと、初めて厚岸に来た冬に食べたコマイの美味しさ、吹雪の中での馬籠(ばそり)やスキーでの通学、大雪のなかで牛を追うのに苦労したこと、春の大雪のために初出勤に遅刻したこと、牧場でのクロスカントリーなど、各人各様の思い出が語られました。

表1 ワークショップのプログラム

あっけし牡蠣博士認定委員会 ワークショップ 厚岸の食と文化と環境をどう守るか

- 日時：2010年11月7日(日) 13:30-16:30
- 場所：たけだ工務店(厚岸町太田3の通り)

プログラム

- 13:30 開会のご挨拶
- 13:35 今日の予定の紹介
- 13:40 アイスブレイク
「冬の厚岸、私の思い出」
- 14:00 話し合い お題の1「いいなあ、厚岸」
- 14:30 話し合い お題の2「残念、厚岸」
- 15:00 休憩
- 15:15 話し合い お題の3「これからの厚岸」
- 16:00 話し合い 「共感、厚岸！」
- 16:10 ふりかえり
- 16:30 閉会のご挨拶

お話しいただく際の4つのお約束

1. 個人としてご発言ください。
2. ご発言の前に、
 - 1) 黄色カードに文章を書き、
 - 2) 説明を試みなさんの了承を得てから
 - 3) 貼ってください。
3. 他の方がお話しになっているときには、お話しにならないようお願いします。
4. 他の方のご意見を批判なさらないで下さい。

図1 話し合いの4つのお約束

2. 話し合い

話し合いを始める前に、「お話しいただく際のお約束」(図1)を確認しました。すなわち、1. あくまで「個人」として発言すること、2. 発言の前にカードに記入をして、それを他の方々に見せて説明し、必ず了承を得ること、3. 他の方の発言をさえぎらないこと、そして、4. 他の方の意見を批判しない、ということです。

お題の1 「いいなあ、厚岸」

最初のお題は、厚岸で「いいなあ！」と思うものです。ここでは、海の幸・山の幸＝美味しい食材が四季を通じて途切れることなく多種多様にあること、そして、その生産を支える厚岸湖、別寒辺牛川、大黒島などの自然環境が豊かであること、これらに依拠した江戸時代からの歴史が挙げられました。

お題の2 「残念、厚岸」

次のお題は、厚岸で「残念だなあ」と思うことです。これについては、せっかくの一次生産物に付加価値が十分につけられていないこと、海の環境の変化を科学的に解明しようとしないうまま、漁業が対応できていないこと、町の人口の減少傾向、第一次産業の後継者が残らないことへの危惧などのほか、厚岸の人はひとみしりがち、助け合う気持ちが薄いのではないか、環境の変化についても海の人と山の人がお互いに早い段階で認知して理解し合うようなことがなかった、など

が挙げられました。

お題の3 「これからの厚岸」

最後のお題は、「これからの厚岸にどのようなになって/あってほしいか」です。

「とにかく『変わる』こと。長い歴史に安穩としているのではなく、変化する必要性を感じることで、住んでいる人たちの意識も変わるし、目的意識も共有できる」という提起に始まり、厚岸町の基幹産業である沿岸漁業(人手不足や高齢化)と酪農業が抱える課題(価格の年間変動や生産量の限界)が具体的に出示されました。

そのうえで、厚岸には住み続けられる町、自然を活かした「それなりの」町になってほしいが、ここで生まれ育った人たちが暮らしていけるためには、第一次産業の仕事の確保が重要であること、そのためには、量から質を重視するように生産を変えていくことや女性の活躍の場をつくることも含めて、従来の個人プレイから互いに助け合う形態へと変えていくこと、外から人に来てもらい、さらに、その人材を活用することが必要であること、などが挙げられました。そして、個人も組織も意識を変えていくことが基盤として大切であろう、ということがおもに話し合われました。

最後に、こうした変革を「誰がやるのか」を今後の課題として共有し、今回の話し合いを終えました。

作成された模造紙を写真1に示します。

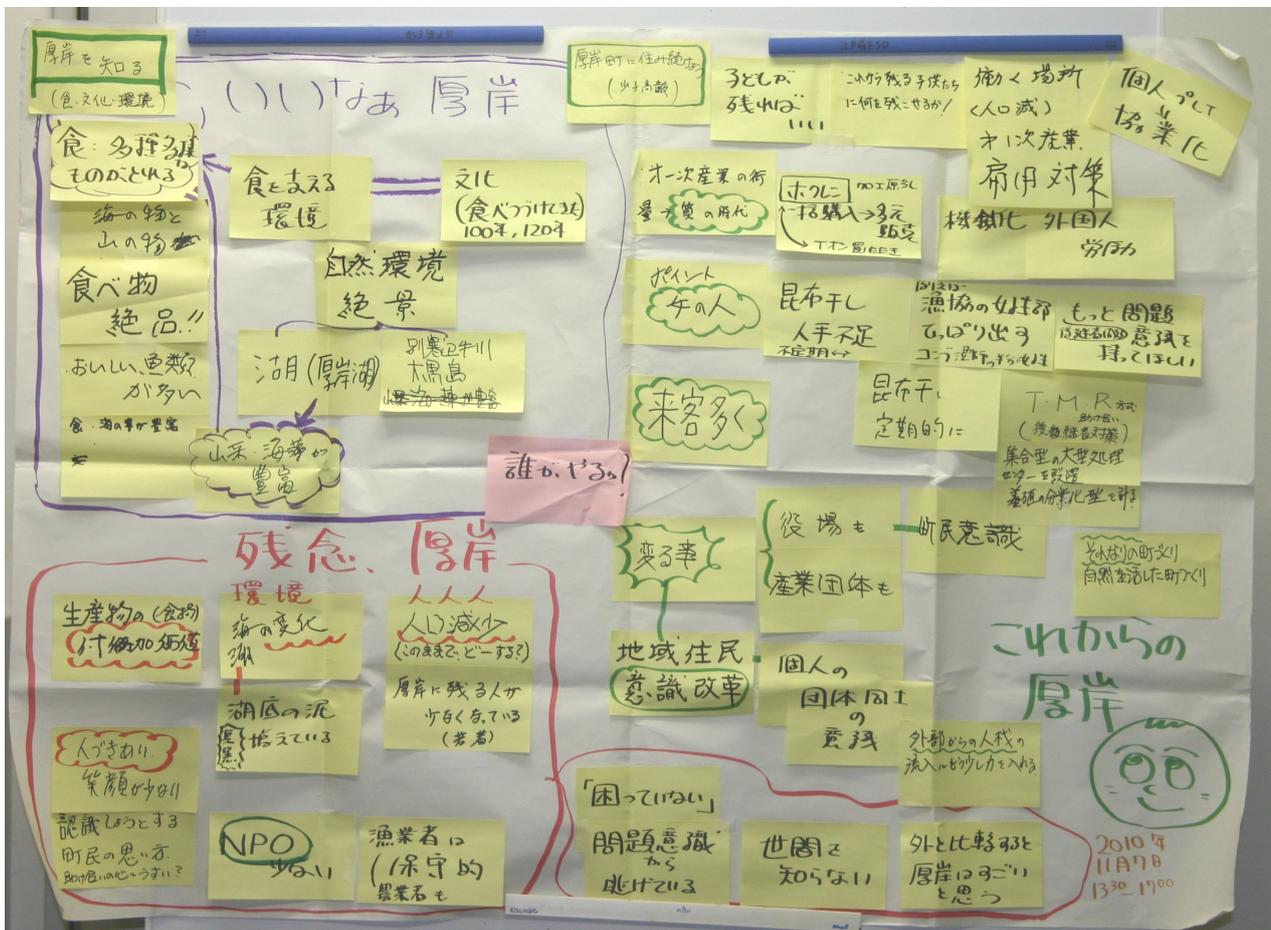


写真1 ワークショップで作成した模造紙。これを図として描いたものを図2に示します。

3. ふりかえり

ワークショップの終わりには、「ふりかえり」をおこないます。今回は、各自が「ふりかえりシート」に記入した後、ひとことずつ、ワークショップを通して考えたことや感じたことを述べ、全員で共有しました。

感想として、「文字で表現されるとわかりやすい」、「みんなが厚岸をよくしたいと思っていることがわかった」、「今後、私たちがどうしていかなければならないかを考えさせられた」、などが述べられました。

また、「こういう機会を多く持った方がよい」という意見が出た一方で、「意見が違う人を交えてやったときにも、今日くらいの意見が出るようになることが大切」であり、「違う年代層を交えてやったらもっと面白い」こ

とから、「もっとテーマを絞って、若い人の意見を最初からとり入れるようなことをしてみたい」、「少人数の中で若い人を交えてやる機会をつくりたい」などの意欲的な提案も出されました。

「ふりかえりシート」に書かれたおもな感想や意見を表2にまとめます。

最後に、「次回は、みなさんが信頼できる人をひとりずつ連れてきていただくと、またいろいろな意見が出てくるのではないかと。来年の牡蠣博士認定試験も大成功に終わらせたい。同時に、ワークショップを続けて、NPO法人化も考えながら、『誰がやるのか』を見出していくのが、ポイントだと思う」という実行委員長のあいさつをもって、本ワークショップは閉会しました。

川辺みどり（東京海洋大学・海洋科学部）

表2 ワークショップを終えて（ふりかえりシートから抜粋）

Q1 ご自分の意見を他の方に伝えることはどれくらいできましたか？

- 集まった人たちとは、仕事は異なっているけど、いつも話に出ることは、「この町を良くしたい！」との思いです。今回も「自分の思い」は伝えられたと考えています。
- 同じような考えを持っている人が多く、やりやすかった。
- ひとつのテーマについて何回も聞く、話すの繰り返しで理解が深まるのだと思いました。

Q2 他の方の意見をどれくらい理解できましたか？

- みなさんが人の話をよく聞いた。
- 普段聞けない分野の人の話も聞けてよかった。
- だいたい同様の考え方を持っていると思われる。
- 全員地元の方ばかりなので、相手の話にうなずける所がたくさんあった。
- 同感するものが多く、わかりやすかった。
- 共感できる、できない、で理解は変わる。
- まずは人の話をよく聞くことが大事ですね。今日、本当に思いました。
- 「これからの厚岸町をどうしようか」との課題に意見が多く出された。課題があるから、物事が考えられ、行動を起こせるので、大事なことではないかと思う。
- 「異業種の集まり」が牡蠣博士認定試験委員会を通して、4年以上続いています。改めて、参加者の意見を伺うことができましたし、これからは「町づくり」の意見交換は行っていきたい。

Q3 今日のワークショップについてのご感想、コメントなどを自由にお書き下さい。

- 漠然と思っていたことなど、このような形で表すこと

ではっきりと見ることができ、しっかりと考え直す良い機会でした。

- 課題がたくさん出たので、今後、自分達がどの様にしていかなければいけないかを考えさせられた。
- 意外とみんなの認識に共通なところが多かったのに驚いた。似たような考えの人が集まったからか、それとも町民がそうなのか、知りたい。
- 参加者の意見がたくさん出て、議論ができた。この程度の人数だと言いやすいのかも。
- 色々な分野の人たちが集い、話す場ということでは、良いと思う。…酒ぬきで。
- あらためて順序立てて考えてみると、たくさん問題点があることがわかった。このような手法により、テーマ毎に論じて問題に向かって進んで行くことは、大変良い方法だと思います。もっと色々な分野の人も参加してもらえたら良いと思います。
- 「最終的に誰がやるのか」の問いに対して、行政主導なのか民間主導なのかどちらにせよ、ゴールにむけた行動が大事ではないかと感じた。またそのきっかけづくりとしてのワークショップであったと思った。
- 今回のお約束の中で、「他人の意見」を批判してはダメとのことであった。この条件はすばらしいことである。このような場で意見を出すと、すぐ、売り言葉に買い言葉ではないが、感情的になってしまったり、話し合いにならないことが多い。
- 初めての体験です。とても良かった。人の意見と自分の意見を同時進行で考えるやり方にはとても共感しました。またやりましょう。

 あつけし牡蠣博士認定実行委員会
 〒088-1143 厚岸郡厚岸町太田3の通り
 竹田 敏夫
 電話 (0153) 52-7600
